

○議長（明和善一郎君） これより、村政一般に対する質問並びに提出案件に対する質疑を行います。

通告順に発言を許します。

4番 森 弘秋君。

○4番（森 弘秋君） おはようございます。

通告してあります、まず、村長の次期の村長選の出馬に向けての決意について伺います。

ご存じのように、村長の任期は平成29年1月であります。村長は平成24年6月議会で、当時、2期目の目標で、住民と行政による協働、すなわち行政主導から住民が主役となり、地域の自主性や地域と行政の連携強化を図り、また、小学校の耐震、改修、増築庁舎の耐震化、防犯カメラの設置など、住みよい環境づくりを2本柱として、村民のためのまちづくりに取り組んでこられました。

住民と行政による協働並びに住みよい環境づくりの目標は功をなし、そして3期目の目標、夢は、舟橋村が日本一の健康な村になること、舟橋村に住んでいる人はみんな健康で生き生きとしていると言われるような村をつくることである。このことを目指し決意されています。

さて、この間、平成25年度には村民憲章を歌詞とした村歌をつくり、平成26年度には総合庁舎のエレベーター設置、高齢者にとっては非常にありがたい設備であります。また、上市消防署舟橋分遣所の業務開始、今や村民の緊急時の足となっております。平成27年度には、舟橋産米を利用した日本酒「ふなはし」を製造販売。すこぶる評判がよいと聞いております。さらに、産学官金での地方創生プロジェクトチームの立ち上げ、子育て世代の転入促進など、子どもを育てる環境づくりに邁進しておられます。ことし5月には舟橋駅前公園が完成し、これから村民の憩いの場として親しまれることを期待したいものです。このように、多くの成功例の快挙にいとまがありません。

しかし、公約に掲げた舟橋村が日本一の健康な村になるための目標はこれからで、道半ばである事業があるのではないのでしょうか。日本一面積が小さい村としてのアピール以外に、別の視点から考える事業があるのではないのでしょうか。さらには、企業は人なりとも言われます。村長が言っておられる環境づくりのためにも、村職員の育成にも力を注ぐ必要があるのではないのでしょうか。

このように考えますと、舟橋村の村政を金森村長に引き続き担ってほしいと願うのは

私だけでないと思います。多くの事業を、網羅的に事を実行するのは非常に難しいと思われませんが、時間をかけて地道に推進されることを期待します。

しかし、村政をあずかる立場として、常に住民の目線に立って、村民の意見に耳を傾け、かつ聞きながら実行してもらいたい。このことの期待を含め、村長の決意と抱負をお聞かせ願います。

余談ですが、一昨日、「舟橋村史」が発行されました。私も時間をかけて読んでまいりたいというふうに考えております。

次に、災害の未然防止・対策は万全になされているかであります。

「災害は忘れたころにやってくる」とのことわざがあります。昨今は、「災害は忘れないうちにやってくる」であります。今のご時世は何が起きるかわかりません。本当に油断大敵であります。

人間のできることには限界があります。しかし、それを未然に防ぐことには多くの英知が注がれてきました。だが、防げない事故があることも否めないわけであります。防災にかける知力、体力、財力を惜しんではならないのではないかと考えます。

さて、災害には、地震、水害、津波、土砂崩れ、雪害、台風等、多くの災害があります。近年では、熊本地震、豪雨、そして広島土砂崩れ、東北大震災、そして津波、阪神・淡路大震災等が記憶に新しい出来事です。

近県では、能登半島地震、中越沖地震などがありました。また56豪雪もありました。今でも熊本地震が発生しております。現象が起きてからでは遅いのです。

これからも、舟橋村にいつどのような災害が発生するかわかりません。想定外という想定以外の出来事が発生する可能性があるわけです。

地震では、呉羽山断層帯、砺波平野断層帯が最も危険な断層帯であると言われております。

先日の報道の全国地震動予測では、富山市において、危険度は減少したものの可能性があるわけだと政府の地震調査委員会の学者が言っております。

中でも懸念するのは、舟橋村で起きた災害、44年の水害、舟橋村民にとって44年の水害が記憶に残っている災害であります。白岩川の氾濫です。

このことの教訓から、白岩川水系の改修が現実味を帯びてきたのであります。白岩川の治水工事は、昭和21年及び昭和27年の水害により被害を受けたことから、築堤及び護岸工事が実施されたと記録があります。ところが、44年大洪水は、浸水戸数3,

880戸、1,025ヘクタール、鉄道、道路に多大な被害を及ぼしたとの記録も残っております。

それから、平成20年8月でしたか、我が村にゲリラ豪雨がありました。各用水が氾濫する寸前でした。当時、私は自治会長をしておりました。その当日の朝でしたか、村長から6時ごろ、特養老人ホームふなはし荘の用水が危ないとの電話があり、私はこれは大変だと駆けつけたわけであります。特養老人ホームふなはし荘の裏側を流れる用水が、あと10センチも水位が上がれば決壊です。そのとき職員の皆さんは玄関の水かきに一生懸命でした。稲荷地内は道路が浸水です。幸いゲリラ豪雨は通過して難を逃れましたが、長雨になれば大変でした。

少し話は前後しましたが、白岩川の氾濫を受け、白岩川ダムは昭和45年に着工し、完成したのは昭和49年であります。

富山県の資料で平成20年の白岩川水系河川整備計画によりますと、局部改良事業による部分的な改修にとどまっており、計画予定の整備がなされておりますが、河川整備の現況は白岩川本川、支川のいずれにおいても部分的であり、いまだ十分な段階に達していないところであります。早急な対策が必要であるとの提言でありましたが、改修工事はいまだ日の目を見ておりません。

例えば特養老人ホームふなはし荘の裏側を流れる、先ほど言いました用水の護岸、堤防のかさ上げをしたところで、最終的にその水を受け入れるのは白岩川であります。この川が未整備であっては、さいの河原であります。したがって、危険がいっぱい残っております。

こんな中で、6月7日に緊急情報告知システム放送の試験が実施されました。このことは非常に評価に値すると思います。小さいことからでも実行したいものです。

この訓練時に、放送が全然聞こえないと役場当局によく言ったものです。このシステムにつきましては、私をはじめ多くの議員の質問がありました。想定外な災害が各地で起きている。このときこそ、44年大洪水を検証し対応が必要であると考えます。

さらには、いざというときの対応、避難場所の確保をどうするか。水害ばかりではありません。総じて全災害に対する点検が必要と考えます。かつ、村民に災害、防災に対する意識の高揚、周知をどうするか、危機管理意識をどのように考えてもらえるか、そのために行政は何をするのか、何をしておかねばならないのかであります。

二、三日前でしたか、ニュースにありましたように、黒部川水防連絡会では、梅雨や

台風などで洪水の危険性が高まる前に、黒部市と入善町の黒部川流域で合同河川巡視を行ったそうです。

このように、ふだんの行動が村民の災害に対する意識の高揚につながると確信します。前向きな答弁をお願いいたします。

最後に、よく聞く言葉ですが、誰かが言っていました。最後は自分で自分を守るしかないと言っておりました。ごくごく当たり前ですが、その前にやっぱり行政として何をするかであります。

終わります。

○議長（明和善一郎君） 村長 金森勝雄君。

○村長（金森勝雄君） 4番 森 弘秋議員さんのご質問にお答えいたします。

私が平成17年1月12日に村長に就任して以来、間もなく11年6カ月が経過いたします。この間、日本一面積が小さい自治体として、財政とのバランスを大切に、身の丈に合った行政運営に努めながら、村民の皆さんが自信と誇りを持ち続けることができる村づくりを進めてまいりました。

3期目となります平成25年1月12日からを振り返りますと、まず住みよい村づくりに関しましては、25年度には富山県東部消防組合が発足し、翌26年10月には上市消防署舟橋分遣所が開所いたしました。安全・安心なまちづくりへの大きな一歩を踏み出すとともに、村民の悲願でありました全国初の非常備消防の解消となったわけであります。

そして村史編さんについてであります。平成24年4月に編さん作業に着手して以来4年余りの歳月を経て、先般、発刊の運びとなったものであります。本村の歴史を広く村民の方に知っていただきたいという思いから、村内に全戸配布することとしたところであります。数多くの方に目にさせていただき、舟橋村をより深く知っていただくとともに、これからのまちづくりの一助になることに大きな期待を寄せているところであります。

住民、地域、行政ともに推し進める協働型まちづくりにつきましては、24年度には心身ともに日本一健康な村を目指した健康構想を策定し、村歌「ちっちゃな舟橋村」の制作及びイベントなどでの普及を通して、住民同士のつながりの強化を図ってまいりました。

25年度には環境総合整備計画を策定し、27年度から産学官金と住民が連携いたし

まして、地方創生に係る地方版人口ビジョンと総合戦略を取りまとめるとともに、子育て共助につながる宅地造成などのマスタープランづくりや公園活用事業などの関連事業を進めているところであります。

舟橋村は、平成元年以降の人口増加施策が功を奏しまして、若く元気のある村と評されるようになりました。しかし、皆さんご承知のとおり、ここ数年の人口は横ばい状態であり、昨年1年間はわずかながらも減少しております。

村独自の推計によりますと、このまま何もしなければ、2060年には人口が現在の3分の2の約2,000人にまで減少するとともに、急激な少子高齢化に伴う税収の激減など、諸般の影響は免れません。

小規模自治体である本村にとって、持続可能なまちづくりのためには、住民同士のつながりは極めて重要なものであります。「子育てしやすい環境づくり」をテーマに、住民同士の支え合いを産学官金連携で生み出し、富山県全体に普及しようとするこの取り組みは全国的にも珍しく、舟橋村だからこそできる先駆的な取り組みと自負しているところであります。

子育て環境の整備では、英会話を一つの柱として取り組んでおります。今年度民営化したしました保育園や、昨年度開所いたしました子育て支援センター「ぶらんこ」では、既に未就学児を対象にした英会話教室を開始しております、大変好評をいただいているところであります。今後は、小中学校が1校ずつしかないという教育環境を生かし、中学校卒業まで継続した英語学習が行えるよう進めてまいり所存であります。

10年、20年後の舟橋村に思いをはせるとき、将来を担う子どもたちの姿が目に見えかびます。

議員ご質問の今後のことですが、子育て共助のまちづくりに向けた取り組みはまだまだ始まったばかりであります。タウンミーティングなどで村民の皆様のお話をお伺いいたしますと、その期待の大きさを身に感じ、改めて職責の重さを感じますとともに、今思い描いております舟橋村の将来の姿を何としてでも具現化しなければならないという思いが募ってまいります。

今後とも、村民、行政、民間企業などがお互いに支え合い、アイデアを出し合って、村民お一人お一人がまちづくりの主役になれるまち、そして将来への大きな夢と希望を感じる舟橋村に住んでよかったと思える村の実現に向けて、再度、粉骨砕身、力を尽くしてまいり所存であります。

引き続き議員各位のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げまして、答弁とさせていただきます。

ありがとうございました。

○議長（明和善一郎君） 生活環境課長 吉田昭博君。

○生活環境課長（吉田昭博君） 4 番森議員の災害時対策についてのご質問にお答えいたします。

議員ご指摘のとおり、近年では大規模な地震や集中豪雨、いわゆる自然災害が多発しております。

ことし4月に発生しました熊本地震では、マグニチュード7.3、最大震度本震7を観測いたしました。住宅の下敷きや土砂崩れによる死者に加えて、たび重なる地震により多くの住民が避難所や車内での生活を余儀なくされ、エコノミークラス症候群などによる震災関連死も報告されているところであります。

また、水害につきましては、平成24年から毎年のように日本列島の各地で豪雨災害があり、昨年9月には関東・東北豪雨が発生し、鬼怒川の決壊による大規模な浸水被害については記憶に新しいところであります。

村内では昭和44年の8.11災害以降、大規模な災害は発生しておりませんが、平成10年、11年、平成20年の集中豪雨に伴う被災が村内の一部で発生しております。また、近年では、春先の強風による住家や農業用施設の被害が見受けられます。

ご承知のとおり、村内を貫流する河川はいずれも二級河川に指定され富山県の管理になっておりますので、村ではそれぞれの河川につきまして危険箇所を調査し、県に対し改修要望活動を行っております。

また、森議員さんのご指摘の二級河川白岩川につきましては、昭和44年8月の豪雨により、富山市水橋地区、舟橋村、上市町放士ヶ瀬地区、立山町泉地区が甚大な被害を受けたことから、県では白岩川改修整備計画に基づき、法線の見直しや川幅の拡幅等による抜本的な河川改修を進めております。

当該事業計画では、改修延長は栃津川の合流から河口までの6.8キロメートル、総事業費145億2,600万円であります。これまでに築堤、護岸、河口導流堤などの工事を終えており、平成27年度末の進捗率は76.8%であります。

今後は、残りの護岸延長398メートル、橋梁2橋、鉄道橋1橋を順次改修していくと報告を受けておりますが、未実施地区につきましては早急な対応を要望してまいりた

いというふうに考えております。

一方、村では、水害のみならず、地域防災計画に基づきまして、気象警報の発令時には総務課職員が庁舎内に待機し情報収集や危険箇所の巡視等を行い、万一の事態に備えております。

また、災害時の広報手段といたしましては、IP告知システムの活用に加えて、エリアメールなどの周知手段を活用すると同時に、広報車等による巡回などによる周知を図ることにしております。

災害時における備蓄品につきましても、現在、150人3食分のアルファ米や水、缶詰、粉ミルクなどの食料品や毛布、土のう袋などを備蓄しております。

しかし、行政としてできる役割には限界があります。このことから、村民の自助意識の向上を図ることも大変重要なことでもありますので、日ごろから災害に対しての備えとして、緊急持ち出し袋や生活用水として利用するために風呂に水をためておくことなどの啓発を今後とも努めてまいります。

さらに、自主防災組織の活性化のためにも、広報紙やホームページ、タウンミーティング等で周知してまいります。村全体での防災意識を向上するためには、自治会や議員の皆様からの働きかけも必要であり、ご理解とご協力をお願い申し上げまして答弁させていただきます。

○議長（明和善一郎君） 森 弘秋君。

○4番（森 弘秋君） ただいまは答弁ありがとうございました。

2つ目の質問ですが、何か具体性がない。例えば用水の改修云々とありましたが、こういうものについても舟橋村として、単純に用水だけの改修としますと、これにかかる予算、金がないとできませんので、では年次計画で、例えば芦原、舟橋という感じで具体的にやってほしいと。ただ単に、はい、わかりました、それこそ先ほど言いました網羅的にやりましょうでは全く意味がないと思います。したがって、具体的にどうするか、私はそれを最終的に問うたわけです。

白岩川は私も先般、改修計画を見ました。百四十何億でしたかね、今答弁がありましたけれども、それに基づいて何か整備計画をするそうです。

この白岩川につきましても、県が49年にダムを完成させたと言った後、全然進んでいないわけです。私が知っているのは白岩川の水橋河口付近、それから私のところの、若干芝生になっている箇所がありますが、ところが、真ん中の中間、おなかの部分は全

くないんじゃないかと。そういったことが平成27年度に少し、28年度、29年度の予算で少しやろうじゃないかと。やっと県も重い腰を上げたのかなというふうに思っております。

ということで、白岩川そのものは何年かかるかわかりませんが、よくなるだろうと。そうすると、やっぱり今度は村全体の、私が一番心配するのは、舟橋村では災害という水害が一番大きいんですよ。その水害に対する対処方法、それともう1つは、災害が起きたときに、四、五年前からか、もっと前からでしたかね、防災訓練ということで避難訓練等々やっておりますが、私が自治会長だったとき、最初は緊張感を持ってやっていたんですが、最近何となく緊張感がない。ただ単に、集まりましょう、わーわーということではなくて、それこそ先ほど言いましたように、災害はいつ起きるかわからないんですよ。そのためにも、緊張感を持った整備計画といいますか訓練といいますか、そういうものをやってほしいと。

ちょっと長くなりましたけど、質問の中で、ならば、ことしは無理かもしれませんが、29年度から、30年かわかりませんが、少し予算をつけて、用水の改修とか用水の見回りとかということについてやっぱりやってほしいということについて、何か村当局で、行政側でそういったことを考えている思案があれば今ひとつお聞きしたいと。何もありませんでは本当にお粗末だなという感じがしますので、何かありましたらお願いします。

○議長（明和善一郎君） 副村長 古越邦男君。

○副村長（古越邦男君） 森議員さんの再質問についてお答えをさせていただきたいと思っております。

用水の年次計画を立てた改修事業というご質問があったんだろうというふうに思っておりますが、用水の維持管理につきましては、舟橋村土地改良区適正化事業等々もここ十数年間やっておりますし、村といたしましても、当然、必要な箇所について対応をとってまいったわけでございます。

防災意識の向上につきましては、当然、地域の方々とともに意識の向上に努めていくということになるかと思いますが、自然と共存できる村づくりということが一番の根底になるものというふうに思っております。

議員ご指摘のとおり、我々行政と地域の方々との手と手をつなぐことが安心向上につながっていくものというふうに思っておりますので、ご指摘いただきましたことを十分



に考慮いたしまして、今後とも取り組みをしてみたいというふうに思います。